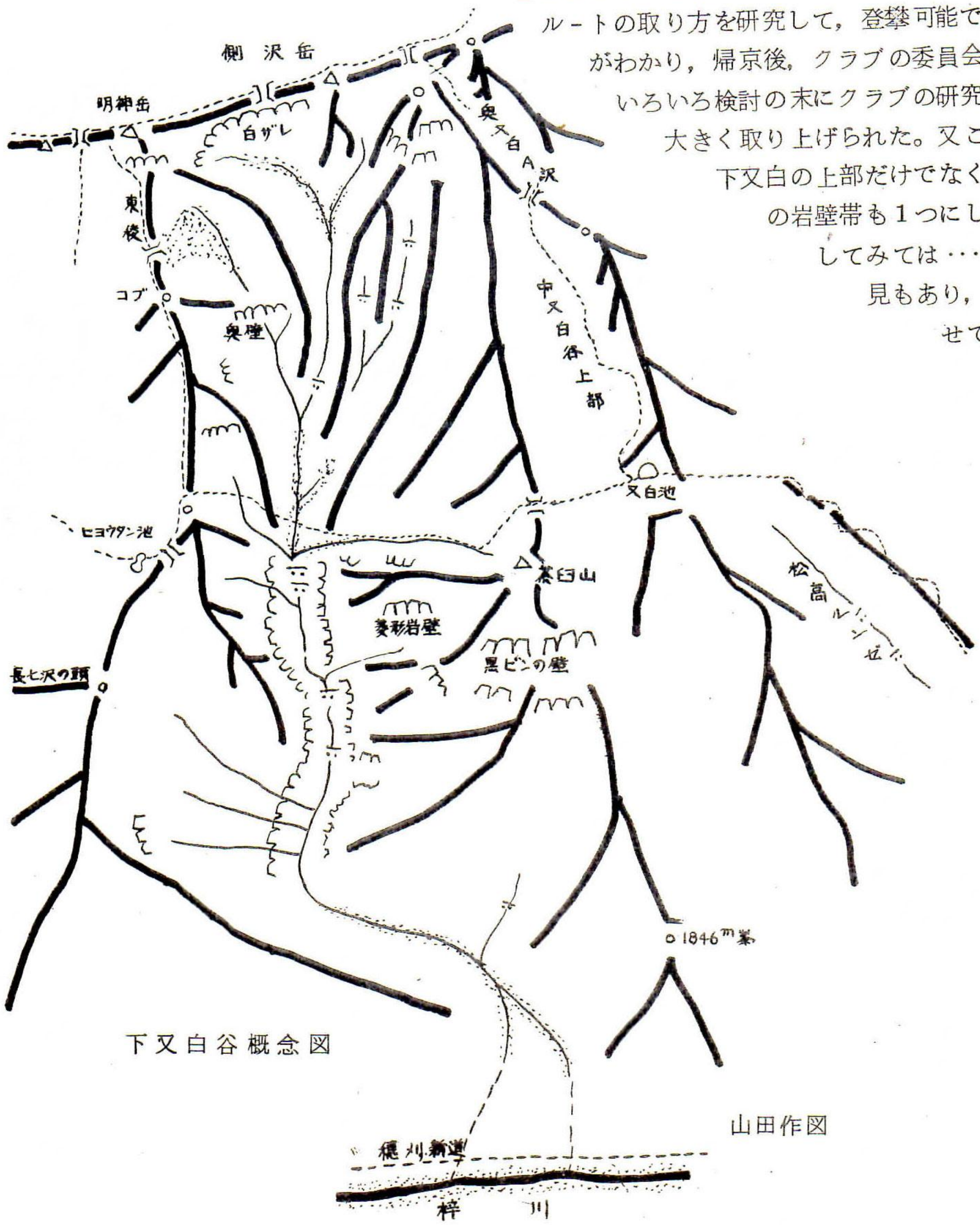
又岩稜会が１９４９年に左岸のブッシュ帯を下降している。しかしこの未知の岩壁を無雪期，登攀を試みたのは我々が最初であり，穂高岳の中でただ１つ残された最後の岩であると云う事が出来る。

私達がこの壁を登攀の対象として考える様になったのは，昭和３６年，奥又白の山行の時，１０日間の予定で奥又白の池に入ったのであるが，毎日毎日雨ばかり降り，登れたのは北尾根のみ，他はテントで酒を飲みながらゴロゴロしている時，たまたま穂高の未登攀の壁の話題が出て，あれこれ話が出た時，秋山の話で「今までぜんぜん登攀の対象にならなかった壁がある。」と云う事を聞き，雨の中をぞろぞろと茶臼の頂上まで行って，ガスの中に見え隠れする，どす黒い陰惨な問題の壁（下又白谷奥壁）を驚きの眼指しで見とれた。その時の山行で壁の長さ，ルートの取り方を研究して，登攀可能である事がわかり，帰京後，クラブの委員会で発表いろいろ検討の末にクラブの研究目標に大きく取り上げられた。又この時，下又白の上部だけでなく，下部の岩壁帯も１つにして研究してみては・・・との意見もあり，上下合せて１つの



下又白谷概念図

山田作図